

SSOR 2007 ルポ



梅谷 俊治（電気通信大学）

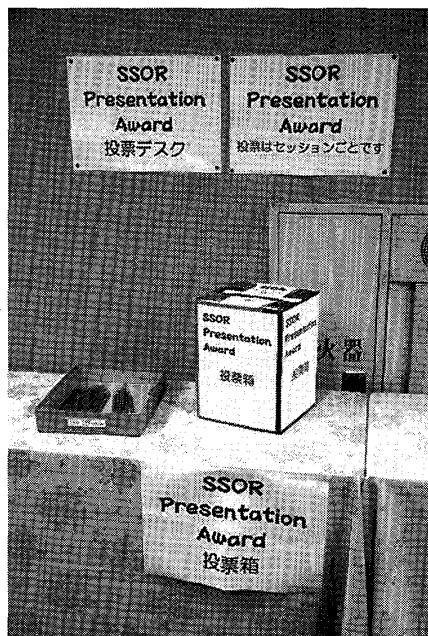
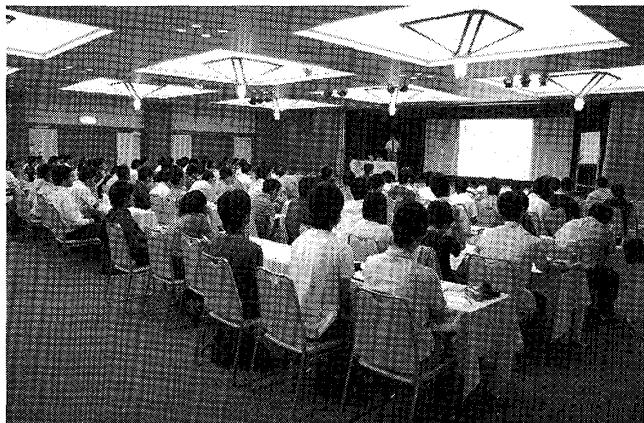
SSOR は、オペレーションズ・リサーチ分野で活動する人材の交流支援とその交流からの創造的活動を目的とした合宿形式夏季セミナーで、1965 年から 1998 年まで開催されました。残念なことに第 33 回を最後に途絶えてしまったのですが、このたび OR 学会創立 50 周年記念事業の一環として、SSOR 2007 と題して 8 月 29 日から 8 月 31 日の 3 日間、静岡県伊東市の伊東ホテル聚楽にて 9 年振りに開催されました。伊豆半島の東海岸の中心に位置する伊東は関東一の湯量を誇る温泉街で、今回の会場である伊東ホテル聚楽は大浴場と露天風呂を備え、客室も綺麗で食事もおいしく大変快適に過ごすことができました（今回の SSOR では研究発表に飲み会と終始忙しく、温泉や部屋でゆっくりできなかつたのはちょっと残念でした）。久々の開催にもかかわらず、参加者数 169 名、講演数 52 件と歴代の SSOR の中でも最大規模のセミナーとなりました。また、SSOR 2007 ではアイログ株、株構造計画研究所、日本信号株、Think Science 株と多くの企業にご支援いただき、企業からの参加者も十余名と、企業と大学の若手研究者の交流も達成されたのではないかと思います。

研究発表は学生・若手の研究者の皆さんのが講演を中心でしたが、いずれの講演も丁寧で分かりやすくしかも熱意がこもった良い講演が多かったと思います（最近の学生は本当にプレゼンテーションが上手で、私自身は準備不足もあって惨敗でした）。また、すべての

研究発表が 1 つの会場で行われるのも SSOR ならではの良い所です。普段の学会や研究発表会では、分野ごとに異なる会場で研究発表が行われることが多いので、参加者も分野ごとのグループに分かれてしまします。しかし、SSOR では全ての参加者が 1 つの会場に集まってさまざまな分野の研究発表を行うので非常に一体感があります。特に、学生・若手の皆さんにとっては、自身の専門分野以外の多くの研究発表を聞くことができて良い刺激になったのではないかと思います。

今回の SSOR 2007 の企画として、SSOR Presentation Award がありました。これは、SSOR 2007 の各研究発表に対して聴衆が投票を行い、「オペレーションズ・リサーチの面白さを感じさせてくれた」研究発表 5 件を選出し、その講演者を表彰するものです。今回の SSOR では、秋季研究発表会の SSOR セッションで表彰式が行われ、以下の 5 名が表彰されました。

- ・ 佐藤圭介氏（財鉄道総合技術研究所）
「列車ダイヤ乱れ時の乗務員再スケジューリング問題」
- ・ 宮代隆平氏（東京農工大学）
「囲碁における連数最大化問題」



- 森田隼史氏（日本信号㈱）
「鉄道運賃計算と経路探索」
- 熱田光紀（関西学院大学）
「汎用ソルバーによる時間割制作成の試み」
- 宮本裕一郎氏（上智大学）
「最短路をものすごく早く答える方法」

また、敢闘賞として以下の4名が表彰されました。

- 土村展之氏（東京大学）
「離散凸関数に対する連続緩和を用いた最小化アルゴリズム」
- 山倉克俊氏（筑波大学）
「合併プロセスからみた平成の大合併」
- 稻川敬介氏（南山大学）
「最適化手法を用いた救急車の移動経路と移動速度の推定」
- 田中健一氏（東京理科大学）
「円盤都市における時間軸を考慮した捕捉フロー最大化問題」

受賞された皆さん本当におめでとうございます。SSOR Presentation Awardが発表者の皆さんの励みになったのはもちろんですが、投票による選出方式で聴衆の皆さんも積極的に参加していると感じることができたかと思います。これも今回のSSORを大いに盛り上げた要因の1つだったと思います。

1日目には「ORの最前線」と題した企画セッションが行われ、山田裕通氏、佐藤祐介氏（構造計画研究所）、フェレンツ カタイ氏（アイログ）より、実際の業務におけるORのさまざまな適用事例が紹介されました。講演では、最先端の多くの事例について紹介があり、ORの適用範囲の広さとその可能性を感じることができました。また、夜には夕食（立食形式の懇親会）と並行してポスターセッションが行われ、私もこのセッションで発表しました。事前に準備する時間がなかったため、普段の研究発表で用いるスライドをA4用紙に印刷したものをつけ合わせてポスターにしたのですが、文字も図も小さ過ぎて全然アピールできませんでした。しかし、ポスターの前に人が集まってわいわいがやがやと議論するのは楽しいもので、また機会があればポスターセッションで発表してみたいと思いました。

さて、懇親会も終わると合宿ならではの夜の飲み会が始まります。飲み会というと酒好きが集まって大騒ぎするだけのように見えますが、初めて会った研究者や学生同士がおやつをつまみながら酒（もしくはソフ



トドリンク）を飲んで、研究に関係あることないことを楽しくときには真剣に話しながら親睦を深めるという、SSORならではの非常に大事な時間です。例えば、初日には互いに見知らぬ同士だった各大学の学生さん達が、2日目、3日目と夜を経るたびにお互い親しくなっているのを見ると、やはり飲み会もSSORの大事な要素の1つだと思いました。特に、今回のSSORではお酒におつまみ、飲み会の会場まで実行委員の方々に用意していただき、まさに至れり尽くせりでした。また、元気な学生さんや若手の研究者が多かったおかげで飲み会も大いに盛り上がり、大変楽しい夜を過ごすことができました。

2日目の夕食は宴会場でオペレーションズ・リサーチ○×クイズ大会が行われました。クイズは「学会創立40周年記念「OR用語辞典」の最終項目は「割引き」である」（答え：×、最終項目は「ワントゥマンマーケティング理論」）や、「SaatyとDantzigによる未来の都市に関する共著の書名は「Impact City」である」（答え：×、書名は「Compact City」）など大変な難問が多く、ORの専門家が集まっているにも関わらず皆さん次々と脱落していました。もちろん私もこの○×クイズ大会に参加したわけですが、両隣にいらっしゃった名参謀とよく分からない強運のおかげで全問正解を果たし「ORの達人」の称号を得ることができました（こうしてSSOR 2007のルポを書くことになりました）。夕食時の座席配置はくじ引きでランダムに決められたので、クイズ大会では初対面の人同士が相談する姿もあり、イベント1つ1つが参加者の交流につながるよう工夫されているのだと実行委員の方々の努力に頭が下がる思いでした。

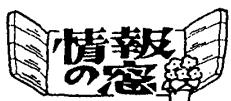
このように、研究発表にイベントに飲み会にと非常に忙しい3日間でしたが、密度の濃い楽しい時間を過

ごすことができました。特に、普段親しく話をする機会のほとんどなかった異なる分野の研究者の方々と親睦を深めることができたのは大きな収穫でした。しかし、このSSORで生まれた新たな交流も、何もしなければたまに研究発表会で会ったときに挨拶するだけの関係に終わってしまうだろうとも感じました。今回のSSORで得たものを今後の研究活動で最大限活用できるよう、参加者の1人1人が工夫していく必要があるかと思います。また、今回のSSORを終えて、研究部会を超えた横断的な交流を促進するイベントの重要性を感じることができました。

今後もさまざまな分野の研究者が交流する機会が得られれば嬉しく思います。

SSOR 2007は、OR学会前研究普及理事の田村明久先生、実行委員を務めていた根本俊男先生、堀田敬介先生、塩浦昭義先生を始めとする多くの関係者の皆様のご尽力によって開催することができました。また、今回のSSORが大変に盛り上がったのは学生・若手の皆さんのがんばりによる部分が大きく、SSORの目的が十分に果たされたと思います。この紙面を借りて、関係者の皆様に改めて感謝したいと思います。

平成19年秋季研究発表会ルポ



後藤 順哉（中央大学）、武田 朗子（東京工業大学）
土村 展之（東京大学）、八木 恭子（東京大学）

1. はじめに

平成19年秋季研究発表会が、前日の創立50周年記念式典・講演会に続き、去る9月27日、28日に政策研究大学院大学六本木キャンパスで開催された。今回の研究発表会は、特別講演が2件と文献賞受賞招待講演、さらに学会創立50周年を記念した国際セッションが設けられ、一般研究発表126件、参加者総数400人超の盛会であった。

会場となった六本木キャンパスの近くには、東京ミッドタウンや六本木ヒルズなど、昼夜問わず魅力的なスポットがたくさんあり、大学までの道のりがとても長く感じた人も少なくはないのではないだろうか。また、キャンパスは、今年オープンしたばかりの国立新美術館のガラスの織りなす曲線美が印象的な斬新な建物と向かい合っているが、大学の建物も負けず劣らず、吹抜けのテラスやガラス張りのエレベータが近代的な空間を作り出していた。

2. 研究発表会：1日目

特別講演：前日の記念式典に続き、INFORMS会長であるBrenda Dietrich氏による特別講演が行われた。講演に先立ち伊倉義郎氏（サイテック・ジャパン株）から、E. Johnson氏やR. Gomory氏に続く、

OR分野3人目のIBMフェローであることが紹介され、また、香田正人氏（筑波大）からはIBMの研究所に赴任したときの上司であったといった逸話が紹介された。

講演序盤では、もの凄いスピードでINFORMSのあらましについて説明があった。かつてINFORMSのAnnual Meetingに参加したときにはその参加者数に驚かされたが、現在の会員数は約12,000名、秋のAnnual Meetingでの発表件数は3,500近いということで、あらためてその圧倒的な規模に驚かされた。その後、近年のINFORMSの“Science of Better”キャンペーンやIBMの“Service Science”に象徴される、より統合的な実務へのORの適用に関して多くの時間を割き説明された。日本ではアメリカに比べるとこの手のキャンペーンが盛んでないように思えるだけに、INFORMS会長がその講演時間の多くをこれに割いて説明する様子からは、その力の入れようが伝わってきた。

講演後の質問では、現在OR学会が抱える悩みである、“アカデミックと実務家との距離”に関連して、INFORMSではどのような工夫をしているのかといった点に複数の質問が及んだ。それに対しDietrich氏は「秋の（研究者向けの）会議は大変大規模で50ものパラレル・セッションで構成される一方、春の会